Special Interview

この人に聞く

学生には「世の中に無駄な努力はない」という想いを胸に、自分を誇れる人間に成長してほしいと願います。
指導者として、学生達を全力でサポートし、いざという時に手を差し伸べることのできる存在でありたいと思っています。

天理大学　体育学部准教授
柔道部　監督
穴井隆将（あないたかまさ）氏

2024年4月22日、天理大学にてインタビュー

▶幼少期の憧れが現実に。全日本選手権での優勝が自身を一回り成長させてくれた

── 柔道との出会い、天理高校・天理大学へ進まれた経緯を教えてください。

私は大分県大分市の出身で、5歳のころに柔道を始めました。警察官だった父親が柔道をやっており、家族で試合を見に行った時に父親の戦っている姿を見て「僕もやりたい」と言ったことがきっかけとなりました。そして中学を卒業するまで、地元大分の「秀鋭館道場」に通っていました。そこで天理大学のご出身である山中圏一先生に柔道の基本を教えていただいた事もあり「正しく組んで一本を取る。正々堂々と戦う」という「天理柔道」の教えが自然と身に付いたように思います。全国中学校柔道大会で初めて日本一になったときに、多くの高校から声をかけていただきましたが、山中先生の教えを基本として今後も柔道をやり続けたいという思いがあり、自分の柔道スタイルに一番合っている天理高校に進学し、必然的に天理大学に進むことになりました。当時、強豪と言われながら、日本一から遠ざかっていたこともあり、私が天理高校に行って日本一になろうとか、天理大学をもう1回日本一にしてやろうみたいな、若さゆえの生意気な気持ちもあったと思います。

── 世界を目指すきっかけになった出来事があったのでしょうか。

「世界」や「オリンピック」を意識したのは8歳の時です。バルセロナオリンピックで、古賀稔彦さん、吉田秀彦さんが金メダルを取った姿をテレビで見て興奮し、「自分も将来オリンピックで金メダルを取りたい」という想いを持ったことを鮮明に覚えています。

── これまで数多くの大会でタイトルを獲得されていますが、転機となった大会はありますか。

やっぱり全日本柔道選手権です。子どもの頃から憧れの大会でもありましたし、世界選手権やオリンピックで金メダルを取るという目標もありましたが、それ以上に「全日本のタイトルが欲しい」という気持ちが強かったので、初優勝した 2009 年の全日本選手権は特別なものでした。今でも、全日本選手権の時期を迎えるとあの時の喜びや感動が蘇えります。全日本のタイトルを取り、まず 1 つクリアしたという安堵感と、柔道家として日本で一番強い称号をもらったという嬉しさがありました。日本一のタイトルを獲得するために積み重ねてきた努力がやっと実を結び、ひとつ山を登ったような感覚でした。この時の優勝で、柔道家として一回り成長できたように感じています。

── 現役時代の思い出を教えてください。

現役時代は自分の限界やゴールを決めないように、前へ前へと毎日を積み重ねていました。そうでないと成長できないというか、立ち止まってしまいそうな気がして怖かったのだと思います。休日はありますが、柔道をやらない日、トレーニングをやらない日でも、頭の片隅には柔道がありました。食事もお酒も制限はありませんでしたが、体重管理だけじゃなく色々な考えが頭をよぎって、羽目を外すという訳にはいきませんでした。常に柔道中心の生活だったので、苦しかったことしか思い出せないですね（笑）。

天理大学　武道館

▶オリンピックを通じて多くの人に柔道を見てもらいたい

── オリンピックに出場されて、感じたことはありましたか。

私はロンドンオリンピックに出場しましたが、やはりオリンピックは特別だと感じました。自分ではいつも通り振舞っていたつもりが、周りから見ると顔色や発言など、さまざまな部分が普段とは違っていたようです。色々な意味でプレッシャーを感じている時点で勝つことはできないという事を思い知らされました。4 年に一度、その日その瞬間にベストパフォーマンスを発揮し、結果を残した人間が金メダリストですから、シンプルに極限で自分を保っていられる強い人間だけが勝つことが出来るのだと思います。

もう一つ特別だと感じたことがあります。私の経歴をご覧いただくと、世界選手権の金メダリストでありながら、どこに行っても「オリンピック出場」の方が大きく取り上げられます。紹介される時も、「元世界選手権 100kg 級金メダリスト」より「オリンピック出場」の方がすごいですねって言われるんです。それだけ国民の皆さんにとってオリンピックに出ることが名誉ある事で憧れも強く、それ故に注目度も高いと感じています。柔道を知らない人が柔道を見る機会といえば、世界選手権よりもオリンピックですよね。今やスポーツを取り巻くメディア環境も大きく変化し、今後、柔道というスポーツがどれほどメディアに取り上げてもらえるのか、どうすれば多くの人に見ていただける機会を作ることが出来るのか、非常に難しい時代を迎えています。その中で、より多くの人に柔道を見るきっかけを与えるのは、やはりオリンピックしかないと感じています。

── まもなくパリオリンピックが開催されますが、日本柔道に期待されることはありますか。

とにかく金メダルを取ってほしい、メダルを 1 つでも多く取ってほしい、日本選手全体で活躍してほしいと願っています。日本人と外国人とい

う垣根なく、強い者が勝つ世界なので「オリンピックで金メダルを取りたい、勝ちたい」というシンプルな気持ちで戦ってくれればいいと思います。

その気持ちや気迫が、見る人を魅了し、感動させることに繋がると思いますので、選手には全力で最高のパフォーマンスを発揮してもらいたいですね。そして、オリンピックをきっかけに、多くの方に柔道に興味を持って見てもらえることを期待しています。

▶スポーツのまちとして柔道を通じて「天理市」を盛り上げていきたい

── スポーツツーリズムへの取り組みについて教えてください。

天理市は「スポーツのまち」として、特に柔道競技において国内外から多くのアスリートが訪れます。東京オリンピックでも、海外の柔道チームのホストタウン登録や合宿誘致、交流事業等を実施しました。そんな中、天理柔道を中心に、スポーツと観光や文化資源を組み合わせた新たな事業として、天理市・天理大学・株式会社 JTB 奈良支店の産官学が連携し地域活性に向けた様々な取り組みを行っています。

これまでに、ジュニア向けの天理大学柔道体験ツアーを実施し、全国から多くの家族が来てくれました。また、海外からは強化合宿としてハンガリーやイギリスなど柔道のナショナルチームが参加しています。天理柔道を体験するだけでなく、地域の企業にもご協力いただいて、見学や体験を通して奈良の歴史や文化に触れ、観光分野でも楽しんでいただける内容になっています。天理市にある資源を最大限活用し、我々にしかできないことをブランディングしていくという意味では、スポーツツーリズムが大きく寄与することの出来る事業ではないかと思います。今年で 3 年目に入り、産官学連携事業として形になりつつありますが、一筋縄ではいかない部分もありますので、課題をクリアにし、色々な方のご意見を聞きながら発展させていきたいと思っています。ご協力いただける企業や力を貸していただける方がいらっしゃれば、ぜひ一緒に天理を、奈良を、盛り上げていくことが出来れば嬉しく思います。

── スポーツツーリズムの中心にもなっている「天理柔道」について教えてください。

中山正善天理教二代真柱が天理大学をつくり、天理柔道会という組織を設立しました。世間では、天理柔道は正しく組んで一本を取る柔道だと言われていますが、実は少し違って、二代真柱の教えは「2 つ組んで正々堂々と戦え」と「姑息な手を使うな」です。その言葉がいつの間にか「正しく組んで一本を取りにいく」という風に変化してきました。背景には、歴代のチャンピオンがそういう柔道をしてきたことがあります。これぞ天理柔道というものを私たちが提唱しているのではなく、見ている周りの方々がそのように評価をしてくださっているのだと思います。その中で、私が考える天理柔道は「執念のある一本を取りに行く柔道」だと考えています。学生達には「何が何でも勝ちたい」という執念を持って戦ってほしいと思っています。

また、「天理柔道」という言葉ができるほど、広く世の中に認められていますので、天理柔道に携わる者として誇りを持ち、その名に恥じない柔道家であるべきだと身を引き締めています。それと同時に、歴代の先生や諸先輩方から教えていただいた天理の伝統や受け継いできたものを学生達にしっかりと伝えていきたいと考えています。

▶指導者として、多くの学生が自分の目標に向かって進めるよう全力でサポートしたい

── 天理大学で准教授・監督をされていますが指導者になられた経緯を教えてください。

天理大学柔道部は歴代、教員が監督を務めており、私も天理大学の教員として授業をしながら、柔道部の監督をしています。オリンピック出場の後、指導者になる道を選びましたが、教員免許は持っていたものの、大学を出てから柔道漬けの生活をしていましたので、奈良教育大学の大学院に入学しました。選手としては、やりきった感がありましたが、指導者という立場で、もう一度学び直したいと思いました。

大学院に入ったのは 28 歳の時でしたので、ひときわ浮いていましたが、年下の学部生や院生達とも打ち解け、時にはお酒も飲み交わしながら色々な話ができたことは、柔道の世界だけで生きてきた者からすると非常に新鮮で、貴重な経験でした。

その後、大学院の 2 年生になった 2014 年 4 月から柔道部の監督をすることになりました。大学教員として授業を持ちながら、空いた時間に修士論文を書き、夕方になれば監督として学生に柔道の指導をするという、怒涛の日々を送っていましたね（笑）。

── 選手から監督になって感じられた事や苦労された事はありますか。

監督になり、任された意味を考えた時に「日本一にしなければいけない」、「強い選手を育成しなければいけない」という想いが強く、「すぐに日本一になってやる」と意気込んでいたように思います。その一方で、教える事がこんなにも難しいものなのかと考えさせられた時期でもありました。当然、私ができることを全員が出来るとは思ってもいませんし、全員が世界チャンピオンになることを求めているわけでもないのですが、そうしたことさえ伝わらない事があり、教えることの難しさというものを身をもって痛感しました。

── そのような経験から学生とコミュニケーションを取る際に意識されていることはありますか。

「関わり方」という意味では、私は観察することが重要だと考えています。一番大切なのは、本人が目指す目標に向かって頑張るためのサポートをすることなので、しっかり観察していれば、本人が困った時や悩んだ時に、過去や現在の状況をわかったうえで色々な角度からアドバイスができます。そこで学生自身が気付くこともありますし、この人は自分のことを見てくれていると感じれば、天理大学での学びが、より意味のあるものに変わると思うのです。部員全員の性格も把握し、理解もしているつもりですが、私一人の力で 100 名ほどの部員全てを指導できるとは思っていませんので、コーチを中心に色々な人の力を借りながら学生達が自分の目標に近付けるよう全力でサポートしたいと考えています。最終的には監督が学生達をどう導いていけるかということに尽きると思います。

「慮（おもんぱか）る」という言葉をご存知ですか？ 相手を慮るとは相手が言わんとすることをこちらが先に知ろうという努力をして、十分に想いを巡らせ相手の気持ちを考えて行動する。そうした慮る姿勢が最近の社会から薄れてきて、時代の変化と共に良くも悪くも自己主張が強くなってきたように感じます。柔道は相手があるスポーツなので、自分の主張ばかりをぶつける試合だとなかなかうまくいきません。相手が何をしようとしているか慮って、勝ちにいく事が必要です。その駆け引きができる選手が減ってきたように思います。誰が悪い

わけでもありませんが、時代の変化のせいにして慮る姿勢がわからないままでは、柔道に限らず人生の成功者になるのは難しいのではないかと思います。指導者も同じで、今の時代、コミュニケーションが大事だと言われていることを、スキンシップを図るような意味合いだと思っている方が多いと思いますが、離れていても観察するというコミュニケーションの取り方もあります。私は年齢が上の人間が慮ることこそが大事なのではないかと思っており、良い時も悪い時もひっくるめて、いざというときに手を差し伸べることができる指導者でありたいと考えています。

── 柔道部の監督として心掛けていることを教えて下さい。

学生には“天理大学に来てよかった”と思う４年間を送ってほしいというのが一番の願いです。勝負の世界に勝ち負けはつきものですので、全員が自分の目標を達成できるかはわかりませんし、そう簡単に自分が想い描いた理想を成し遂げることや、満足いく結果が得られるとは限りませんが、仲間たちとの様々な経験を通じて、一生懸命取り組むことが、“天理大学に来てよかった”という振り返りに繋がると信じています。そのために、私がきれいごとを言っているだけではダメだと思いますので、時には厳しいことも言いますし、それぞれの目標を達成するためには甘やかしません。あの手この手を尽くして、４年間トータルで見たときに"天理大学に来てよかった"という思いで卒業できるように、私自身が常に心掛けておく必要があるという信念のようなものを持っています。

── 天理大学柔道部は 2022 年に全国大会で優勝されましたね。

監督９年目での優勝でした。周りから「よくやってくれた、お前が指導してくれたおかげだ」とお褒めの言葉を頂きましたが、勝てたのはやはり選手の力だということに改めて気づかされました。

きれいごとや、逃げているように聞こえるかもしれませんが、学生達が練習も試合もすべて含めて頑張ったからこそ優勝できたと感じています。

９年間監督をしてきて「勝たせてやれなかったのは私の責任です」と言い続けてきましたが、今考えると恩着せがましい言葉だったと思います。勝たせるという考えはすべて自分が主語です。選手たちには自主性を持ってやれと指導している一方で、考え方の根底には私が勝たせるとか、勝たせてやれなかったという想いがあれば矛盾が生じます。勝つためには自分が頑張るしかないという事を気付かせる事は必要ですが、私の指導だけで勝てる訳ではありませんので、監督の力なんて微力だという事と、最後は学生たちの頑張りが勝利の源だということに気付けた優勝でした。

▶言葉だけでなく自分が行動で示すことで、学生に気づきを与えたい

── 11 年ぶりに現役復帰されましたが何かきっかけがあったのでしょうか。

監督として 10 年という節目を迎えたことが大きいです。10 年間で柔道のルールや流れは、がらりと変わりました。私は柔道の現場にいますので、常にルールを勉強し、対応策を考え学生に伝えていますが、なかなか新しいルールに馴染めない学生を見て、そんなにうまくいかないものだろうか、今のルールの中で実際に自分はできるのだろうか、という思いになりました。いつまで監督をやるかは分かりませんが、この先、指導者としてのあり方を考えた時に一度知っておかないと自分が 10 年前に置いていかれるような感覚になっ

たのが一番のきっかけです。もうひとつ、学生に言葉だけじゃなく行動で示したかったという思いもありました。よく試合で「負けてもいいからおもいっきりいけ」と言いますが、自分が負けるところを教え子に見せたい指導者なんていませんから、言葉だけでは伝わらないと考え、「負けることは怖いことじゃないんだぞ」ということを自分が体現して伝えたいと思いました。今、あえて恥をかく必要がない人生を歩んでいるからこそ、私の弱い姿とか、負ける姿というものを見せれば、何か感じてくれるのではないかと考えました。監督の泥臭い部分を見て「じゃあ俺もやってやるよ」という気持ちになってくれたら嬉しいなと思ったのがきっかけです。

── 11年ぶりの試合に向けて、学生の方と一緒にトレーニングされたようですね。

大会に出るのは冷やかしでも遊びでもありませんので、学生と一緒に走り込みや稽古を行い、短期間で一気に仕上げましたが、継続して取り組んでいる選手とは根本的に体の出来上がりが違いました。試合に出て、技術量では負けていないと感じましたが、技術・体力・気力、全て備わっている者が勝つわけですから、総合的に見れば私は出場者の中で圧倒的に下の方でした。でも、試合に出たことで、技術だけじゃ勝てないが、技術も必要だという事も学生に教えることができました。体力のないおじさんが技術だけでここまで戦えるという事も示すことができました。そういう意味で、チャレンジした甲斐はあったと考えています。

▶世の中に「無駄な努力」は決してない、自分を誇れる人間に成長してほしい

── リーダーシップのあり方についてお考えを聞かせてください。

「リーダーとは自分のリーダーであれ」と私は考えています。リーダー、リーダーシップも含めて、誰かを引っ張るイメージが強いと思いますが、私は自分で自分をリードしていく、自分が自分のリーダーだという考え方が一番大事だと思っています。自分についてこいとか、他人にこうあるべきだというのではなく、自分が自分にとって胸を張れる人間であれば、自然と人がついてくると考えています。指導者としては先ほどの話と重複しますが、関わり方が非常に重要だと考えています。時代に合ったやり方、方法論みたいなものもありますが、最終的に人と人が関わり合う時に大切なのは愛情を注ぐ事で、注がれる側の器も上を向いていないと注げません。人としての根本的な部分は、いつの時代も変わらないはずです。そこを見逃さず、一方通行にならないよう慮る事が一番重要だと思っています。

── 今後の抱負や夢などを教えてください。

忙しい、大変だ、疲れたなど毎日いろいろな感情に苛まれますが、生きているからこそ感じられる事だと思います。そう考えると、死に際にいい人生だったなと思えるように今を一生懸命生きていたいというのが夢であり、目標です。たとえ明日であっても何十年後であっても、良い人生だったと思える日々を送れる事が幸せだと考えていますので、しんどい時や苦しいときは、「生きている限り今を精一杯やろう」と思うようにしています。

柔道部の監督としては、天理で学んだことを糧に世の中で頑張ってくれる教え子を多く送り出したいというのが目標です。現に今、私の後輩や教え子たちは全国津々浦々で幅広く活躍してくれています。教え子たちが活躍している話を聞く度に、心から嬉しく思いますし、頑張っている姿を見て本当に誇らしく思います。今後もそんな教え子を絶やすことなく、自分の学んだこと、自分が経験してきたことを世の中に還元してくれることを期待しています。

柔道部としては、日本一になって学生たちに喜んでほしいという事もありますが、それはあくまで結果論です。日本一を目指していますし、学生たちが日本一になりたいといえば、私たちは全力を尽くします。だけどそれは勝負の世界の目標であって、天理大学柔道部が目指すべきところは、

天理で学んだ事を糧に自分を誇れるような人間に成長し、周りの人に良い影響を与える存在になってくれることだと考えていますので、私も指導者として一層気を引き締めています。

── 若いビジネスパーソンへメッセージをお願いします。

「世の中には報われない努力はあるけど無駄な努力はない」ということです。現役最後に全日本選手権に出場し優勝しました。そのときに実感したことが、自身の指導の根幹にもなっています。

頑張ったからといって必ずしも結果が出るほど、世の中甘くはありません。頑張った人間だけが得られる称号、それが金メダルと言いたいところですが、みんな頑張っている中で、手が届かないこともあるでしょう。自動販売機は 130 円入れると 130 円の飲み物が出てきますが、努力の自動販売機はいくら努力というお金を注ぎ込んでも、その対価が出るとは限りません。その中で諦めずに努力を続けるのは、すごく難しいことだと思います。でもそこで、今回は報われなかったとしても今までやってきた努力が「無駄だった」とだけは思わないでほしい。努力してきた事が将来自分にとって様々な出来事や良い出会いに繋がっていく事でしょうし、いつの日か新たなビジネスの展開を生んでいくこともあると思います。そこは、スポーツ以外の世界も一緒だと思いますので、くじけそうなときは「報われない努力はあっても無駄な努力はない」という想いを胸に、目標に向かって頑張ってほしいと願います。

（聞き手・文責：清原香織）

●プロフィール　穴井　隆将　氏

■主な経歴

2003年　天理高校卒業
2007年　天理大学卒業
2013年　天理大学柔道部 副監督就任
　　奈良教育大学大学院入学
　　天理大学教員として勤務（現在に至る）
2014年　天理大学柔道部　監督就任
2015年　奈良教育大学大学院卒業

■主な戦歴

1999年　全国中学校柔道大会優勝
2001年　インターハイ優勝
2002年　世界ジュニア柔道選手権大会 優勝
2006年　グルジア国際柔道大会 優勝
2007年　アジア柔道選手権大会 優勝
2009年　全日本柔道選手権大会 優勝
　　グランドスラム・パリ 100kg級　優勝
2010年　ワールドマスターズ 優勝
　　世界柔道選手権大会 優勝
　　グランドスラム・東京 100kg級 優勝
2011年　グランドスラム・リオデジャネイロ 100kg級 優勝
2013年　全日本柔道選手権大会 優勝

■座右の銘、好きな言葉

努力

■大事にしていること

日々、一生懸命生きること

■趣味

料理

■好きな食べ物

魚料理

■私のストレス発散法

サウナで汗を流す

■奈良県内で好きな場所（よく訪問される場所）

吉野川の源流

■所属団体等の概要

団体名：天理大学柔道部
所　在：奈良県天理市田井庄町 80
創　部：1925 年（大正 14 年）

■主な戦績

全日本学生柔道優勝大会（男子）優勝11回
全日本学生柔道体重別団体優勝大会（男子）優勝 1 回
2022年：全日本学生柔道優勝大会（男子）3 位、
　　全日本学生柔道体重別団体優勝大会
　　（男子）優勝
2023年：全日本学生柔道優勝大会（男子）3 位